

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫



吉岡長増は、豊後大友家20代

義鑑・21代義鎮(宗麟)の2代

に仕えた重臣で、法名は宗敏。

生年は定かではありませんが、

長増の「長」は、19代大友義

長から拝領した偏諱(功績ある

家臣に主君が与えた自分の名

の一字)と考えられますので、

16世紀半ばの大友家臣団の中

では長老格だったと思われる

す。

大分郡高田庄の千歳城・鶴崎

城を拠点とし、元龜3(157

2)年ごろまでは権力中枢の

「加判衆」の一員、かつ豊前方

面の行政・警察・軍事指揮の各

権限を担当する「方分」の役職

にあったことが確認できます。

また、北部九州に出兵した毛

利軍への後方かく乱を狙って周

防山口に軍勢を送り込み、毛利

軍を九州から撤退させた永祿12

(69)年の大内輝弘の乱は、長

増の調略によるものといわれま

吉岡長増



吉岡氏の居城千歳城跡の石碑 (大分市)

民を思いやり安寧目指した「豊老」

近年、加判衆としての撫民政策を評価する文献史料も見つかっています。元龜年間に京都大徳寺の112世となった臨濟僧玉仲宗瑋による詩文集「玉仲遺文」に収められた、吉岡長増画像賛(絵に添えた賛辞の文)です。難解な漢文ですが、読み下してみよう。

「前越州刺史建孝院殿吉岡悦

翁宗敏庵主は、源家の一裔也。曾て一大事に疑著し、京城大徳に入り、春林師翁に見え、一大事を参決す。既にして豊に帰す。民を郵れみ国を寧する也。人の豊老と称する所以は、蓋し孟公綽の趙魏の老たるが如き者也」

吉岡長増は源氏の一族で、かつて京都大徳寺98世の春林宗寂に師事した。その後、豊後に戻

り、民衆を思いやり、国の安寧を目指したので、人々から「豊老」(豊後大友家の家老)と呼ばれている、との内容です。

さらに、「論語」の「子曰く、孟公綽は、趙魏の老たらば則ち優れたるも、以て滕薛の大

夫たるべからず」(孔子曰く「孟公綽は、大国の趙や魏の執事ならば優れた能力を発揮するが、滕や薛のような小国の大臣ではないらしい」)を例えとして、

大国豊後の家老としての長増をたたえています。

この「民を郵れみ国を寧する」と賛美された「豊老」吉岡長増は、天正元(1573)年に没したといわれます。さらに、島津軍と戦った同6(78)年の高城・耳川合戦では、子の鑑興も戦死しました。玉仲宗瑋による贊の日付は、合戦直後の12月3日。5年前に夫を亡くした長増夫人が、絵師に依頼して描いてもらった夫婦の肖像画に、息子

の戦死後、新たに玉仲に贊を添えてもらい、永く供養したものだといえます。

(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1回掲載